



愛

高め合い、磨き合い、感動し合う学校をめざして

当たり前をかみしめて～修学旅行～

10月7日から2泊3日の修学旅行は、「この仲間と最高の思い出を作ろう！」～今しかできないこと～It will surely be a good trip! のスローガンのもと、日頃学校で勉強したことを実際に見聞することによって知識や教養を深めたり、団体生活によってお互いをよく理解し合ったり、規律を守ったりするというねらいを理解し、有意義な修学旅行になりました。保護者の皆様のご理解ご協力をいただき実施できましたことに、心より感謝いたします。

修学旅行を振り返って

【保護者の声】

- ・まず行くことができて良かった。そして、無事に帰ってきたことも良かった。事後の検温と家族の健康管理をしっかりします。
- ・お土産をたくさん買ってきてくれました。土産話も聞きました。
- ・東日本大震災の爪痕は、家族で目にしなければと思いました。
- ・親としては、京都でないなんてと思っていたけれど、今回の計画は良かったと子どもが言っていました。



【生徒の声】

〈アクアマリン〉

- ・魚だけでなく、普通の水族館にはいない動物もいて楽しかった。古代魚の化石などがあり、水族館だけでなく博物館にいるようで楽しかった。
- ・2年のときのクラスの班別行動は久しぶりだったので楽しかった。
- 〈東日本大震災・原子力災害伝承館〉
- ・実際の映像を見たら、ぼんやりとしていた震災のイメージがはっきりとしてきた。
- ・久々にあの日のことを思い出した。あの日のことは鮮明に覚えている。幼稚園の駐車場にいたときに、起こったあの出来事。忘れることができない。忘れてはいけないことだと改めて感じた。
- ・福島県の被害は他県とは全々違うことが分かった。
- ・津波の映像がショッキングでしたが、その分震災で起こった事を知ることができました。「安全と言われていた原子力発電が…」と言っている県民の方の声を聞いて、現在安全だと言われているいろいろなことでも、いつか安全ではなくなってしまうのではないかと思い、恐怖を感じました。
- ・震災のひどさや被害（津波、爆発、放射線）あらゆる自然災害の怖さが分かった。当たり前が当たり前でなくなるのが、こんなに怖いとは思わなかった。これからは、当たり前を幸せと感じ生きたい。
- ・「命」、普段何気なく通りすぎていく景色。今一緒に生活し遊んでいる友だちがいることがどれほど幸せで、当たり前ということがどれだけありがたいものなのか、改めて考えさせられた。助けられなかった命が少なくないということ、今でもなお自分が元いた場所に帰ってこない人がいるという事実があることが心苦しくなった。
- ・未だに復興作業が続き、まだまだということに驚いた。二度目は起こらないでほしいと思った。
- ・伝承館へは実際訪れて、訪れた人は映像や資料について伝えていくことが大切だと思った。
- ・救助隊の人々が無念を感じているという話を聞いて、自分も悲しい気持ちになった。
- ・大地震が二次災害として原子力発電所の事故を引き起こしていることが怖かった。
- ・この町が2つの災害に遭い、恐ろしく悲惨な過去を知らずに見たら、あの真っ平らな風景から何を感じることができるだろうか。原子力発電は私たちの生活を豊かにしてくれているが、人的な危険性があるので、積極的に減らしていかなければならない。

〈浪江町フィールドスタディ〉

- ・車で走っているとき、広い荒地があり、家の中や庭がめちゃくちゃになっているのを見て、ここが帰宅困難地域なのだと分かりました。亡くなった人の話や津波の被害に遭った小学校を見た時は、あまりの生々しさにとても衝撃を受けました。他人事と思わずに、「もしも」ということを考えようと思いました。また、家族にも教えようと思いました。福島の実情を知り、自分が大人になったときにどうなっているか分かりませんが、日本全体の問題として、考えていきたいと思いました。
- ・生きるという言葉が前向きな言葉から少し残酷な言葉に変わった。津波から逃れるために他人を置いて逃げたことを想像すると胸が痛いです。
- ・このような企画でないと行くことのなかった被災地に行くことで、更に地震、津波の怖さを知った。自分が住んでいるすぐ近くの場所、海があるかないかの違いで、こんなにも被害の規模が変わってくるなんて、正直思っていた以上に心に響き頭に入ってくる内容だった。大平山霊園では、実際に経験したことがあるガイドさんの言葉に重みがあり、その悲しみや苦痛が伝わってきた。決して軽い気持ちで訪れてはいけない場所だと思う。自分たちが住む場所のすぐ近くでこんなことが起き、今でも苦しんでいる人がいることを忘れてはいけないと思う。あと少し早ければ、あと少し時間があれば、という「あと少し」の差でこんなに簡単に命が失われていくことが正直怖く感じた。今ある命や幸せを当たり前だと思わず、感謝の気持ちをもって生活したいと思った。
- ・バスで被災した場所を見学したり、実際にその場で話を聞き、どのように津波が来たのか、どのように避難したのかよく分かり、怖いと思った。将来、海の近くに住むことがあるかもしれないので、ハザードマップを見て避難場所を確認しなければならないと思った。
- ・町並みや家の中が震災直後のままとのころが多くて何だか怖いと思ったのと、被害の大きさを感じた。今後同じようなことが起きたとき、避難するときの目印になるようにという思いを込めて植えられた桜の話には、いろいろな対策がされていくのだろうと考えさせられた。また、自分や周りの命を守るためには、そのときの状況にあった行動をとることが大切だと分かった。
- ・車窓からの風景や慰霊碑を前に案内人の方の言葉は、とても心に刺さり涙がでた。中学生の私にはできないことがたくさんあるけれど、高校生や大人になったら福島を助けたいと思った。
- ・荒れた町中や静かな土地に復興の音が響いて、なんだか変な気持ちになった。2時間ぐらいで来ることができる場所を実際に見て、このような悲惨な状態があるなんてなかなか受け入れることができなかつた。これからの日本で必要なエネルギーや対策は、自分たちが進めていかなければならないので、この体験ができて良かった。また数年後に訪れたい。
- ・「起きてしまったことはしょうがない。そこから自分たちが何を感じるか」この言葉に凄い重みを感じました。
- ・空き家を狙った空き巣が絶えないことを聞いて、なんでそんなことができるのか。許せない気持ちになった。

〈会津藩 日新館〉

・日本の現在の教育の基盤にもなったといわれる会津藩の藩校が見られて良かった。今の自分たちよりも厳しい教えを全うしたと思うと、自分たちは甘いと思った。

- ・最古のプールがあり、今とあまり変わっていないことに驚いた。
 - ・弓道体験では、2回目での的に当てることができ嬉しかった。
- 貴重な体験ができて良かった。

- ・とても厳しい学校だと思った。

〈鶴ヶ城〉

- ・どんな人が関わってきたのかがよく分かった。
- ・お城に入ったことがなかったので感動した。中にはたくさんの資料があって勉強になった。
- ・天守閣からの眺めがとてもきれいだった。真っ白な壁に赤瓦が映えていた。

〈七日町班別行動〉

- ・素敵な町並みでした。

〈那須ハイランドパーク〉

- ・学年全員で自由に組んだ班は、大人数や少人数の班となった。友だちとの交流もできたので大満足。たくさんのアトラクションに乗ることができた。
- ・どのアトラクションもマスクをして乗り、毎回消毒をしてコロナ対策をすることができた。



文字ばかりになってしまいましたが、生徒が感じたこと（修学旅行中の毎日の記録からの抜粋）です。どうぞじっくり読んで、お子さんと振り返ってみてください。卒業後の進路選択に繋がるお子さんがいるかもしれません。

おしらせ